

# 非血縁腎移植例の臨床的検討と その倫理諸問題に関する考察

絹川常郎

社会保険中京病院

key words : 非血縁腎移植, 生体腎移植, 移植と倫理

## 要 旨

社会保険中京病院では、2006年4月までに非血縁腎移植（夫婦間9例、義姉妹間1例、友人間1例）11例を経験した。移植23年後に腎機能良好のまま死亡された1例を除き、移植後、3～96カ月を経過し、すべて良好な腎機能を維持している。

夫婦間移植については、開始するころは日本移植学会の倫理規定が曖昧であり、自施設で適切と思われる基準を決めて行った。友人間移植については、まだまだこれから検討し、学会として基準が作成されることが望まれる。

## 緒 言

腎移植の成績の向上は著しい。1980年代前半のシクロスポリン登場以降も、種々の新しい免疫抑制薬や合併症治療方法が開発されてきたことが成績向上の要因である。日本移植学会の最新の報告によれば、1992年以降に実施した生体腎移植の移植腎生着率は5年83.4%、10年69.6%である<sup>1)</sup>。著者らの施設でも生体腎移植では1年生着率は10年間100%を維持しており、10年生着率も2005年末で78%に達している。

現在、移植医にとっての腎移植早期の医学的な課題は、ほぼ定着した感のあるABO不適合間移植をより安全に行うことや、かつて禁忌とされてきた既存抗体陽性患者への移植方法の開発などである。HLAが不適合という理由で移植を見送る移植医はほとんどいな

い。夫婦間移植は2003年には日本の生体腎移植の20%を超える頻度で行われており<sup>2)</sup>、いくつかの施設からまとまった良い成績も報告されている<sup>3,4)</sup>。夫婦間以外のほかの非血縁間での腎移植も、医学的適応があれば当然、臨床的には安全に行える時代である。

移植医療は生体腎では健康人であるドナーに対して手術侵襲を加える問題、献腎移植では脳死問題、臓器配分方法など、倫理的、社会学的領域にも踏み込まざるをえない医療である。著者は、最近、増加傾向のある非血縁間生体腎移植についても、今一度、その足下を見つめ直しておく必要があると考えた。

本稿では、著者の経験を元に、まず現在の非血縁腎移植の成績について報告し、ついで非血縁移植の本邦および諸外国での実態について紹介し、最後に生体腎移植におけるドナー選択に関する著者の考え方について述べたい。

## 1 社会保険中京病院における非血縁腎移植の成績について

当院における、最初の非血縁腎移植は1981年の夫婦間移植である。患者は37歳の女性で、夫をドナーとする生体腎移植を希望し来院された。患者は当時、すでに10年以上の血液透析による合併症に苦しんでおり、夫の妻を思う気持ちも自然なものと判断した。ABO血液型は適合しており、HLAはAB2抗原が適合していた。シクロスポリン登場前であったが、当時、胸管ドレナージ前処置による移植成績が良好であった

報告を義務付ければ非倫理的な移植の実施の抑止力となるだろう。

### おわりに

ある研究会での報告を契機に、本原稿の執筆の依頼を頂いた。精神医学や倫理問題の専門家ではなく移植医である私には任の重い主題であった。しかし市中病院で腎移植の臨床に携わる臨床医が、日本の腎移植のあり方に関して日頃考えていることを透析関係の先生方に理解して頂ければ良いのではと考え思いのままを記した。本稿がなにかの参考になれば幸いである。

### 追 補

9月初旬に本稿を脱稿して約1カ月後、宇和島でドナーに報酬を支払う約束をした生体腎移植が行われたことが明らかとなった。日本移植学会は生体腎移植に関する規定を改めるべく調査中である。私は、本稿で生体腎移植は、腎不全患者を救う重要な医療であるが、十分な検討を加えてから行うべきであることを述べたつもりである。今後、善意のドナーに対しても不愉快な思いをかけるかもしれないが、ある程度、確認作業を複雑化せざるを得ない情勢である。この事件を契機に生体腎移植がより公正で安全な医療となることを期待している。

### 文 献

1) 日本臨床腎移植学会, 日本移植学会: 腎移植臨床登録集計

- 報告 (2005)-3 2003 年追跡調査. 移植, 40; 358-368, 2005.
- 2) 日本臨床腎移植学会, 日本移植学会: 腎移植臨床登録集計報告 (2004)-2 2003 年実施症例の集計報告 (2). 移植, 40; 143-154, 2005.
- 3) 片山昭男, 打田和治, 富永芳博, 他: 当センターにおける非血縁者間 ABO 血液型不適合生体腎移植症例. 今日の移植, 18; 98-100, 2005.
- 4) 森 義明, 新井兼司, 相川 厚, 他: 夫婦間腎移植の臨床的検討. 移植, 39; 549-555, 2004.
- 5) 日本移植学会: 腎移植臨床登録集計報告 (1990). 移植, 26; 494-517, 1991.
- 6) 日本移植学会倫理指針改定. 移植, 39(1); 2004.
- 7) 春木繁一: 臓器移植に関連する精神医学的問題—日本における生体腎移植の経験を中心に—. 移植, 40; 264-272, 2005.
- 8) 平賀聖悟: 非血縁生体腎移植. 移植, 27(5); 655, 1992.
- 9) Terasaki I, Cecka M, Gjertson W, et al.: High survival rates of kidney transplants from spousal and living unrelated donors. N Engl J Med, 333; 333-336, 1995.
- 10) Cecka M: The OPTN/UNOS Renal Transplant Registry 2003. Clin Transpl, 2003; 1-12, 2003.
- 11) Spital A: Increasing the pool of transplantable kidneys through unrelated living donors and living donor paired exchanges. Semin Dial, 18; 469-473, 2005.
- 12) ERA-EDTA Registry Annual Report 2004. <http://www.era-edta-reg.org/index.jsp>
- 13) Choudhry S, Daar S, Richards R, et al.: Unrelated living organ donation: ULTRA needs to go. J Med Ethics, 29; 169-170, 2003.
- 14) Goyal M, Mehta L, Schneiderman J, et al.: Economic and health consequences of selling a kidney in India. JAMA, 288; 1589-1593, 2002.